
男と女の話。

春日小雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男と女の話。

【Nコード】

N5213G

【作者名】

春日小雪

【あらすじ】

僕はそのとき、ベッドに横たわっていた。横には女がいる。そう、女だ。彼女なんかじゃない。ただの女だ。

――ねえ：

声が、聞こえる。

そのまま無視していたら、少し苛立った声が聞こえた。

――ねえったら。

僕は仕方なく目を開け、首だけ動かして右を見た。

女の顔が飛び込んできた。

瞳を潤ませ、軽く口を開いている。

「なに？」

僕がそう言うと、女の顔がほころんだ。

――なんでもない。

恥ずかしそうに、しかし嬉しそうにそう言うと、女は視線を逸らした。

：僕は何をしているんだろう。

寝転んだ姿勢のまま、天井を見上げた。

風で開いたカーテンの隙間から、細くネオンの光が差し込んでいた。

さっきまでまだ明るいと思っていた空は、もうすっかり夜のそれに変わっていた。

右手に何かが触れた。

女が手を重ねてきたようだ。

再び右を見た。

やはりそこには女の顔があり、女も僕を見つめていた。

女がゆっくりとその顔を近づけてくる。

僕は抵抗せずに、それを見ていた。
やがて、女の唇が僕の唇と重なる。

それをきっかけに、僕は女を抱きしめ、荒々しく舌を絡めた。
女は色っぽい声を漏らした。

女に覆いかぶさるように、もぞもぞと身体を浮かせた。
女を見下ろす。

女が見上げてくる。

――ねえ、好き？

潤んだ瞳は、妙に艶めかしく輝いていた。

僕は答えなかった。

代わりにキスをした。

そして、女が何か言う前に女の足を強引に広げた。

――あつ、だめ。

女が抵抗してくる。

それらを一切無視し、僕は淡々と作業を進める。

そう、これは作業なのだ。

自分の良心に言い訳をする。

自分を、この女の満たされない部分を埋める為の作業なのだ。

ふと、鏡が目に入った。

洗面台の大きな鏡は、女と、女の足に挟まれている男を映していた。

男はこちらを睨みながら、肩で息をしていた。

対照的に、女はつまらなそうな顔で天井を見上げていた。

男が急に動かなくなったので、女は自分の足の間を見た。

男は顔を女から見て左に傾け、そのままピクリもしなかった。
そこに何があるのか、女は知っている。

女も顔を左に向けた。

鏡の中の男と目が合った。

鏡の中の女と目が合った。

視線を絡めたまま、鏡の中の女が言った。

――悪いことしちゃったね。

そして、にやりと口元を歪めた。

――結婚、するんでしょ？

それは、悪魔の宣告のようにも聞こえた。

気がつく、僕は馬乗りになり、女の首を絞めていた。

女の口から、蛙のような声が洩れる。

僕の手首に、女の細い指が食い込む。

僕はそれでも絞めつづけた。

しだいに食い込む指の力が弱まり、やがて女の手が力無く落ちた。

訪れたのは、夜独特の静寂だった。

僕は慌てて、いつ脱いだのかわからない自分の服を着た。

そして、逃げるようにドアを飛び出した。

その後はもう、とにかく無我夢中でネオンの中を走り続けた。

今日も、いつもと同じ夜が更けてゆく――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5213g/>

男と女の話。

2011年1月13日17時44分発行